

# 『弁論術』と『トポス論』のトポスの共通点と差異

高橋 祥吾

## 1 はじめに

本稿の目的は、アリストテレスの『トポス論』の中で列挙されている様々なトポスを、『弁論術』のトポスと対比させながら分析することである。すなわち、『弁論術』のトポスと『トポス論』のトポスの差異を明確にすることが目的となる。比較するための対象となるトポスは、『弁論術』第二巻第23章で挙げられているトポスと、『トポス論』第二巻から第七巻で列挙されているトポスである。

二つの著作のトポスは、それぞれの著作の目的や考察対象などによって、分類や列挙の仕方、用いられる具体例などが変わっている。本稿では、まず二つの著作におけるトポスの扱いについて確認する。はじめに、『弁論術』においてトポスが「共通のもの」として扱われている、いわゆる「共通のトポス」が存在することを確認し、次に『トポス論』におけるトポスの列挙の特徴について確認する。そうして、『トポス論』におけるトポスと『弁論術』のトポスとで共通点を確認する。すなわち、『トポス論』の「最も利便性の高いトポス」と呼ばれるものが、『弁論術』のトポスと共通であると考えられる。そして、その共通するトポスに関して、それらの間の差異を検討する。

このような検討を通じて、アリストテレスが『トポス論』で言及している「最も利便性の高いトポス」が、『弁論術』のトポスとしても用いられているならば、『弁論術』のトポスが、『トポス論』よりも推論に対してより一般的に利用できるトポスだと言うことができるかもしれない。本稿は、このような可能性について検討するものである。

## 2 『弁論術』におけるトポス

アリストテレスは『弁論術』第二巻第23章のなかでトポスを列挙している。『弁論術』の中では、トポスはエンテューメーマという弁論術の推論で用いられるもので、エンテューメーマは問答法の推論に対応している。

『弁論術』の中で挙げられるトポスは弁論術で用いられる推論に適用されるため、列挙されるトポスは当然、弁論術で用いる際に有用なトポスとなっている。つまり、弁論の場で有用なトポスばかりが挙げられている。しかし、ここで挙げられているトポスには、弁論の場面以外でも有用なものが含まれているように見える(この点は後述する)。

また、問答法であれ弁論術であれ推論にはトポスが必要である。このときトポスは「共通のもの」とされ、その対になるものとして「固有のもの」が立てられる。この「固有のもの」は、トポスではなく、どちらかと言えば推論で用いられる命題のことを指しているように思われる<sup>1</sup>。この点について、アリストテレスは以下のように述べている。

---

<sup>1</sup>固有のものはどのようなものだろうか。伝統的解釈では、「固有のもの」もまたトポスであると理解されてきた(たとえば, Glimaldi 1980, 349–350)。しかし, 1358a23–25 を見る限り, 「固有のもの」は推論の前提命題(πρότασις)であるように思われる。そのため, Rubinelli(2003)のように, 「固有のもの」をトポスと見るのではなく, 『トポス論』第一巻第15章の命題を選び出す「道具」として「固有のもの」を関係づける解釈は示唆に富む。また Raphael(1974)のように, 「固有のもの」は πρότασις であるが, それは推論の「前提命題」ではなく, 推論を可能にする原理となる命題のことであるという解釈も検討の余地があるだろう。「固有のもの」については, 稿を改めて論じたい。

というのも、私が言っているのは、問答法の推論と弁論術の推論は、我々がそれらについてトポスを論じるところのものなのだとということである。

そして、このトポスは、正しいもの、自然のこと、政治的なこと、種において異なる多くのことについての共通のトポスである。例えば「より多く」や「より少なく」というトポスである。正しいものや、自然のことや、政治のことや、〔その他〕何であれこれらについて、このトポスに基づいて同じように推論したり、エンテューメーマ〔弁論術の推論〕を述べることができるだろうからである。

その一方で、「固有のもの」とは、個々の種と類をめぐる前提命題に基づいている限りのものである。たとえば、自然のことについて前提命題があり、それらに基づいては、倫理なことについてのエンテューメーマも演繹的推論も成立しない。そしてこれら〔倫理なこと〕についての他の前提命題は、それらに基づいては自然のことについての〔エンテューメーマも演繹的推論も〕成立しない。そして、このことはすべてのことについて同様である。

そして、かのもの〔=共通のトポス〕はいかなる類についての精通者も生み出さないだろう。なぜなら、かのもの〔=共通トポス〕は、いかなる主題とも関係がないからである。

その一方で、これら固有のものは、人がよりよく諸命題を選べば選ぶほど、その人は問答法や弁論術とは別の学知を生み出していることに気づかずにいるだろう。というのも、諸原理に行き着いたときには、それは、問答法でも弁論術でもなくて、その人がその原理を手に行っているその学知ということになるからである。(Rhet. A 2. 1358a10–26)<sup>2</sup>

この引用では問答法の推論も弁論術の推論（エンテューメーマ）も同じ推論として扱われている。推論としては、問答法であれ、弁論術であれ、同じであるとアリストテレスは考えているように見える<sup>3</sup>。

このように、トポスを推論で用いる「共通のもの」としてアリストテレスが扱うとき、弁論術と問答法で推論の区別をしていない。『弁論術』において、アリストテレスは問答法の推論には、共通のものとしてのトポスと、固有のものが存在すると考えている<sup>4</sup>。

### 3 『トポス論』におけるトポス

#### 3.1 述語様式によるトポスの分類

『トポス論』は、その書名の通り、第二巻から第七巻で様々なトポスを列挙している。このときアリストテレスは、系統立てて整理した形で数々のトポスを列挙しているように見えない。ア

<sup>2</sup>『弁論術』の底本は、Kassel(1974)である。Oxford Classical TextsのRossの校訂と大きく異なる読みをした箇所については、注において言及する。また、訳出に際して、邦訳は戸塚七郎訳(1992)、英訳はKennedy(2007)を参照した。

<sup>3</sup>この点に関連してBurnyeatは、『トポス論』と比べ、『弁論術』の推論は、推論の妥当性に関して緩くなっていると解釈する。その理由のひとつとして、『トポス論』と『弁論術』の推論の定義(説明)を比較すると、アリストテレスは『トポス論』に存在していた「必然的に」という表現を『弁論術』の推論の定義(説明)では除いているからである(Burnyeat 1994, 24–25)。つまり、アリストテレスは厳密な意味で論理的に妥当と呼べない推論も、『弁論術』では適切な推論として許容していると解釈できるのである。この点はRubinelliが言うように(Rubinelli 2009, 54; 54n20)、議論の余地があるだろう。

<sup>4</sup>この他に注意を払いたい点は、アリストテレスはここでは自然についてと倫理なことについて、推論や議論があり、それらに共通のものとしてトポスを考えているように見えることである(ここで政治的なことや正しいものは、倫理なことに含まれていると考えられる)。それに対して、『トポス論』では、問答法の対象として倫理的な事柄と自然学的事柄に加えて、論理学的な事柄もアリストテレスは挙げている(Top. A 14. 105b19–25)。この点については、ひとつの推測として、論理学的な事柄は、弁論術の対象としては基本的に取り上げられないことがないため、『弁論術』では言及されていないと考えることはできるだろう。

リストテレスによるトポスの配列は、分かりやすい意図に基づいているとは思えないのである。

しかしそうは言っても、『トポス論』の中で推論で用いるトポスは無秩序に配列されているというわけではない。『トポス論』第一巻で規定される「述語様式」、すなわち「付帯性」、「類」、「固有性」、「定義項」に基づいて、トポスは配列されていると言って良いだろう。Smithはこの述語様式がトポスの分類のための最も高い観点 (the highest level) を提供していると指摘している (Smith 1997, xxx)。

『トポス論』の述語様式に基づくトポスの分類の観点は、この著作のどこにおいても明言されていない。しかし、このことから述語様式に基づく分類をアリストテレスが意図していなかったとは言いきれないだろう。少なくとも、類かどうかを判別するトポス、定義を判別するトポスなど、述語様式の規定や特徴に依拠したトポスが存在することそのものが、述語様式に基づく分類を可能にしていると言って良いだろう。

述語様式は、問答法の問題 (*πρόβλημα*) や前提 (*πρότασις*) を作るためにも必要なものである。むしろ、『トポス論』第一巻第6章で述べられていることから考えるなら (*Top.* A 6. 101a34), 「定義的な」ものである述語様式とそれらから作られる問題や前提は、『トポス論』の問答法の目的にとって欠くことができない本質的なものであろう。

『トポス論』第一巻第2章では、問答法の目的にして有益である理由が三つ挙げられているが (*Top.* A 2. 101a25–36), それに加えて述べられている<sup>5</sup>, 論証の原理を見出すことこそが『トポス論』で論じられている問答法の目的であろう (101a36–b4)。この目的を達成するための述語様式の理論であり、トポスの列挙だと言えるだろう。すなわち、定義は論証の原理の一つであり、当然、その定義は正しく定められなければならない。そして、述語様式のなかの定義項が対象に述語づけられることによって、定義は正しく定められる。そのため、問答法による考察の対象となるものが定義を表しているのかを判別するために、トポスを用いた推論が必要とされるのである。トポスを用いて、与えられた命題の述語が定義項かどうか吟味されるのである。

以上のように、『トポス論』においては、定義を作り上げるために問答法が必要とされることから、『トポス論』で列挙されるトポスも、定義構築の観点から述べられていると考えるのはおかしいことではないだろう。そして、『トポス論』では実際に、定義探究に有用な述語様式ごとに、トポスがまとめられているのである。四つの述語様式は相互に排他的でかつ網羅的であるから、考察対象となる命題の述語が定義項以外の述語様式を表していると判明すれば、その命題は定義ではないことになる。定義項以外の述語様式に基づいたトポスは、間接的に吟味対象の命題の述語が定義項かどうかを吟味することになる。

したがって、『トポス論』においてトポスを分類する観点は、この述語様式に基づくものだと考えて良いだろう。

### 3.2 『トポス論』における分類のための別の観点

その他に、トポスを区別する観点はいくつか存在する。その一つは、立論に有益か、論難に有益かという点である。つまり、相手によって与えられた命題（主張）を否定して拒否するために使えるトポスなのか、自分が主張する命題を説得的に作り上げるために有効なトポスなのか、あるいはその両方に有用なのかという点でトポスを区別できる。

問答法を用いるということは、問答の相手が提出する命題を吟味して破棄したり、あるいは自分が命題を立てて擁護するということである。そのため、トポスもまた命題を構築したり破棄したりするための推論を構築するために用いられることになる。したがって、破棄するためだけに

<sup>5</sup>この点については、哲学的な諸学問のために有益だという三つめのものに、論証の原理の話が含まれる、または敷衍しているという考えも可能かもしれない。

有効なトポスが存在していても構わないし、構築するためだけのトポスがあっても問題ない。

また、「同じ」という観点からトポスを述べることも、アリストテレスは行なっている。それは第七巻においてである。これは第一巻第7章で述べられていることに呼応しているだろう。この観点もまた、定義を探究するという目的からすれば、取りうる観点である。

しかしながら、注目に値するのは、「最も利便性の高いトポス」と呼ばれるものである。アリストテレスは、第三巻や第七巻において、利便性の高いトポスとしていくつかの種類を挙げている。

### 3.3 最も利便性の高いトポス

この「最も利便性の高いトポス」について、近年明確に指摘したのは Slomkowski である<sup>6</sup>。この「最も利便性の高いトポス」は『トポス論』第七巻第4章で次のように述べられている。

そして、今述べられたことや、同列語に基づくもの、語尾変化に基づくものは、トポスの中で最も利便性の高いもの(ἐπικαιρότατοι)でもある。ゆえにまた、特にこれらを支配し、準備して持っていなければならない。というのも、最も多くの事柄に対して最も有用であるからである。(Top. H 4. 154a13–15)

ここで「今述べられたこと」と言われているのは、「対立」のトポスと、「より多く」と「より少なく」と「同程度」のトポスである。

Slomkowski はこの「最も利便性の高いトポス」は、『トポス論』の全体で用いられていると述べるが、詳細な考察の対象にしているのは第二巻だけである(Slomkowski 1997, 140)。彼は第二巻第8章から第10章にかけて現れる諸々のトポスを「最も利便性の高いトポス」として扱っているように見える(Slomkowski 1997, 140)。そして Rubinelli もまたそれに同意して、「最も利便性の高いトポス」としてほぼ同じものを採用している(Rubinelli 2009, 41–42)。Slomkowski と Rubinelli を参考に「最も利便性の高いトポス」に含まれるトポスを特定していきたい。まず Slomkowski が挙げるものは以下のものである(Slomkowski 1997, 140)。

- ἀντιθέσεις τέτταρες (四つの反立)
  - ἐπὶ τῶν ἀντιφάσεων (「矛盾対立表現」のトポス)
  - ἐπὶ τῶν ἐναντίων (「反対」のトポス)
  - ἐπὶ τῶν στερήσεων καὶ ἔξεων (「欠如と所有」のトポス)
  - ἐπὶ τῶν πρὸς τι (「関係」のトポス)<sup>7</sup>
- ἐπὶ τῶν συστοίχων καὶ ἐπὶ τῶν πτώσεων (「同列語」と語の「語尾変化」のトポス)
- ἐπὶ τοῦ ἐναντίου (「反対」のトポス)
- ἐπὶ τῶν γενέσεων καὶ φθορῶν καὶ ποιητικῶν καὶ φθαρτικῶν (「生成と消滅」、また「生み出し得るものと消滅させうるもの」についてのトポス)
- ἐπὶ τῶν ὁμοίων (「同様のもの」のトポス)
- ἐκ τοῦ μᾶλλον καὶ ἧττον (「より多く」と「より少なく」のトポス)
- ἐκ τοῦ ὁμοίως (「同じ程度」のトポス)

<sup>6</sup>Smith は、「最も利便性の高いトポス」には明示的に言及していないが、「対立」に基づくトポス、「同列語」と「語尾変化」に関するトポス、そして「より多く」と「より少なく」のトポスの三つを挙げ、この三つに基づいた分類が行われていると見ている(Smith 1997, xxxi)

<sup>7</sup>Rubinelli はこの「関係」のトポスを「四つの反立」の下位区分に入れていない(41–42)が、おそらくこれは単純なミスで、誤植の類いであろう。

しかし、Slomkowski はこれらすべてが「最も利便性の高いトポス」であると断言しているわけではない。単に「最も利便性の高いトポス」の候補を『トポス論』第二巻から挙げているだけだとも解釈できる。少なくとも、彼が詳細にトポスの内容を検討しているのは、「矛盾対立表現」のトポス、「反対」のトポス、「関係」のトポス、「より多く」と「より少なく」のトポス、「同じ程度」のトポスである (Slomkowski 1997, 141–150)。

次にRubinelli は、このリストから *ἐπὶ τοῦ ἐναντίου* のトポスと *ἐπὶ τῶν γενέσεων καὶ φθορῶν καὶ ποιητικῶν καὶ φθαρτικῶν* のトポスを取り除き、その代わりに定義に基づくトポス (*τὸ λόγους ποιεῖν*) を入れている (Rubinelli 2009, 41–42; 76)。後でも触れるが、Rubinelli が『弁論術』のトポスと「最も利便性の高いトポス」との関係論じる時はこのリストを用いている。

アリストテレス自身が「最も利便性の高いトポス」の具体例を明確に確定させていないように見えるために確定的なことは言えないが、本稿では上記の二人の解釈よりも禁欲的であるべきだと考える。すなわち、アリストテレスが想定している「最も利便性の高いトポス」は、四つの「対立」のトポス、「同列語」と語の「語尾変化」のトポス、「より多く」と「より少なく」のトポスに限定されるべきだと考える。「同じ程度」のトポスは、「より多く」と「より少なく」のトポスに含まれると解釈できる<sup>8</sup>。

この三種のトポスは、『トポス論』の中心巻すべてに見られるトポスであり、上記引用でアリストテレスが想定していると考えられるトポスである。それ以外のトポスも、複数の述語様式に利用できる共通性と有効性を持っているかもしれないが<sup>9</sup>、アリストテレスが明確に「最も利便性の高いトポス」として意識しているものは、この三種に限定すべきであろう。

#### 4 「最も利便性の高いトポス」と「共通のトポス」

さて、この「最も利便性の高いトポス」が、『弁論術』第二巻第23章で挙げられているトポスと重複すると考えられる。「最も利便性の高いトポス」は、述語様式に基づくトポスに比べ、定義探究だけにその使用を限定されているわけではない。したがって、もし「最も利便性の高いトポス」が『弁論術』において用いられているならば、『トポス論』よりもより一般的に適用可能なトポスの推論が『弁論術』において扱われていると解釈し得るだろう。

さて、「最も利便性の高いトポス」と『弁論術』のトポスの重複を指摘したのはRubinelli である。Rubinelli はSlomkowski に賛同して、『トポス論』には「最も利便性の高いトポス」と「述語様式に關係するトポス」の二種類があり (Rubinelli 2009, 41)、そして「最も利便性の高いトポス」に含まれる各種のトポスと『弁論術』第二巻第23章のトポスを対応づけている (Rubinelli 2009, 74–5)。

Rubinelli は、『弁論術』と『トポス論』のトポスの関係を論じるときに、『弁論術』のトポスのタイプを、以下のような四つに区別している。

- Type I : 『トポス論』にも見られるトポスであり、普遍的に適用できるトポス
- Type II : 『トポス論』には見出されないが、しかし普遍的に適用できるトポス
- Type III : 「より多く」と「より少なく」のトポスの抽象度の低いバージョンであり、弁論的(つまり、審議的、法用の、演說的)文脈においてのみ用いられるトポス

<sup>8</sup>Rubinelli は、「同じ程度」のトポスを、「より多く」と「より少なく」のトポスに含めることに反対している (Rubinelli 2009, 74n90)。しかし、115a15–24 では、「同じ程度」のトポスは、直前に語られた「より多く」と「より少なく」のトポスを受けて論じられている。そして115a25では、「より多く」と「より少なく」のトポスと「同じ程度」のトポスがまとめて言及されている点も考慮すると、まとめて扱うことは許されるだろう。

<sup>9</sup>引用した *Top.* H 4. 154a13–15 の直後でアリストテレスは、「最も利便性の高いトポス」の他にも共通性があるトポスが存在することを認めている (*Top.* H 4. 154a15–22)。

Type IV：主として、人間関係の対人的あるいは情緒的観点に焦点を当てているか、弁論的文脈においてのみ妥当とみなされる考えに焦点を当てているトポス  
(Rubinelli 2009, 73)

この四つのタイプのうち、本稿で注目するのは当然 Type I である。Type I に該当するトポスは12種である。本稿ではこのうち「対立」のトポスについては、Rubinelli が行なっている以上の、あるいは別の観点からの詳細な検討が必要だと考えている。より詳細な検討が必要な理由のひとつは、Rubinelli が基本的には『トポス論』第二巻のトポスしか参照していないからである。当然、「最も利便性の高いトポス」は第二巻以外でも用いられているため、その点にも配慮が必要であろう。

もう一点は、『弁論術』第二巻第23章のトポスと「最も利便性の高いトポス」に関連があることはRubinelli も認めるが(Rubinelli 2009, 75-6)、この「最も利便性の高いトポス」と『弁論術』第二巻第23章のトポスとでは、細部が異なっていることに注意すべきだと思われる。すなわち、「反対」のトポスの扱いが、『トポス論』と『弁論術』では異なっているように見えるのである。『弁論術』ではトポスの一つとして独立した扱いだと言えるが、『トポス論』では「対立」関係の下位概念として位置付けられ、トポスの列挙の仕方にもそれが表れている。

以下では、Rubinelli を参考にしつつ、「最も利便性の高いトポス」と「共通」のトポスの関係を見ていきたい。

#### 4.1 「対立」以外のトポス

三種の「最も利便性の高いトポス」が、『弁論術』の「共通」のトポスのうち、どのトポスと一致するのか。Rubinelli によれば(Rubinelli 2009, 76)、「対立」のトポスは、1397a7-19の「反対」のトポス、1397a23-b11の「相関関係」のトポス、1400a14-22の「矛盾対立」のトポスと一致する。「同列語」と「語尾変化」のトポスは、1397a20-23の「語尾変化」のトポスと一致し、「より多く」と「より少なく」のトポスは、1397b12-27に同名のトポスとして挙げられている。

このうち、「より多く」と「より少なく」のトポスの一致については問題がないと思われる。「同程度」のトポスも1397b18-27の部分で言及されており、『トポス論』の見方に一致しているだろう。

1397a20-23の「語尾変化」のトポスについては、「同列語」についての言及がない点が相違する。1397a20-23の説明は短いため、「同列語」について、アリストテレスがどのように考えていたのかは明らかではない。

#### 4.2 「対立」のトポスの考察

問題は「対立」のトポスである。Rubinelli は、1397a7-19の「反対」のトポス、1397a23-b11の「相関関係」のトポス、1400a14-22の「矛盾対立」のトポスを挙げているわけであるが、これは『トポス論』における「対立」のトポスの下位概念に基づく各トポスが、これらの箇所でも論じられているということであろうが、詳細な検討が必要であろう。繰り返しになるが、『トポス論』では下位のトポスとして四つのトポスが位置づけられていたが、『弁論術』ではそのような扱いはされていないからである。

さて、そこで「反対」のトポスの扱いについて、『トポス論』と『弁論術』での違いを確認したい。

#### 4.3 「対立」のトポスとその下位区分

まず『トポス論』においては、「反対」のトポスは、「対立」のトポスの中に含まれているように見える。少なくとも、『トポス論』の中では、「対立」の下位概念として「反対」が位置付けら

れている。これは『カテゴリー論』第10章でも見られるものである。アリストテレスは、『カテゴリー論』第10章で、「対立」(ἀντικείμενα)が四通りの仕方でも語られると言う。すなわち、「関係的」(πρὸς τι), 「反対」(ἐναντία), 「欠如と所有」(στέρησις καὶ ἔξις), 「肯定と否定」(κατάφασις καὶ ἀπόφασις)の四通りである(Cat. 11a17–14a25)。

『トポス論』においても、「対立」に四つの下位概念が存在するという捉え方は、維持されているように見える。この点について各巻ごとに確認していきたい。

#### 4.3.1 第二巻の「対立」のトポス

先にも触れた『トポス論』第二巻第8章では、「対立」の代わりに「四つの反立」(ἀντιθέσεις τέτταρες)という言い方をしているが、「関係的」「反対」「欠如と所有」は明示されている。「肯定と否定」については、「対立言明」(ἀντιφάσεις)という述べ方をしている。アリストテレスは、肯定と否定をまとめて「対立言明」という表現で言い表すことがある<sup>10</sup>。

#### 4.3.2 第三巻の「対立」のトポス

また、『トポス論』第三巻第6章では、次のように言われている。

そして、諸々のトポスのうちでとりわけ便利で共通のトポスは、「対立」や「同列語」や語の「語尾変化」に基づくトポスである。というのも、(1)もしすべての快樂が善であるなら、苦痛もすべて悪であると主張することは、もしある快樂が善であるならばある苦痛も悪であると主張することと同様にエンドクサ[定評ある見解]だからである。さらに、(2)もしある感覚が能力でないなら、ある無感覚も無能力ではない。また、(3)もしある判断されうるものが知識されうるものならば、ある判断も知識である。また、(4)諸々の不正なものの中のあるものが善ならば、不正になされたものの中のあるものは善である<sup>11</sup>。また、(5)快いものの中のあるものが避けるべきものであるなら、ある快樂は避けるべきものである。また同じ理由で、快いものの中のあるものが有益なものであるなら、ある快樂は有益なものである。そして消滅させうるものや、生成と消滅の場合も同様である。というのは、もし快樂や知識を消滅させうるあるものが善であるなら、ある快樂や知識は悪に属するものだろう。また同様に、知識のある消滅が善に属するものならば、あるいは知識のある生成が悪に属するなら、ある知識は悪に属するだろう。たとえば、ある人が行なった恥ずべきことを忘れてしまうことが善に属するなら、あるいは覚えておくことが悪に属するなら、ある人が行なった恥ずべきことを知ることは悪に属するだろう。そして他の場合も同様である。というのは、これらすべてにおいて結論は前提と同様にエンドクサ[定評のある見解]だからである。(Top. Γ 6 119a36–b15. 番号は筆者による)

この箇所では、「対立」、「同列語」、「語尾変化」の各トポスが「もっとも利便性の高いトポス」であり、共通のものだということが明示されている。そして、この具体例が列挙されているわけであるが、この具体例に「対立」の下位概念に基づく各トポスが用いられている。

具体例の(1)は「反対」のトポスであり、(2)が「欠如と所有」、(3)が「関係」のトポスである。その後に「語尾変化」(πτῶσις)のトポス(具体例(4))と「同列語」(σύστοιχον)のトポス(具体例(5))が挙げられていると考えられる。

<sup>10</sup>たとえば、『分析論前書』第一巻第1章24b2

<sup>11</sup>Brunschwig(1967)に従い、καὶ τῶν δικαίων τι κακόν· πάλιν εἴ τι τῶν δικαίως κακόν, を読まない。  
なお、『トポス論』の底本はOxford Classical Textsに依拠している。また拙訳のために参考にした邦訳は、池田(2007)と山口(2014)である。

### 4.3.3 第四巻の「対立」のトポス

それに対して、第四巻では、「対立」のトポスというものは明示されてはいない。しかし、第3章では、下位概念の「反対」についてのトポスが取り上げられている。続く第4章では、「欠如」に基づくトポス (124a35–b6), 「否定」についてのトポス (b7–14), 「関係」のトポスが取り上げられている (b15–22)。

### 4.3.4 第五巻の「対立」のトポス

そして、『トポス論』第五巻第6章 (Top. E 6. 135b7–136b2) では、「対立」のトポスが、四つの下位概念に分けられた形で説明されている。ただし「肯定と否定」のトポスは、他の三つの「対立」のトポスとは、少し違った形で語られていて、区別されているように見える。

第五巻の論述はかなり特徴的であり、新しいトポスの説明に移るときは、*ἐπειτα* が用いられることが多い。他の三つの「対立」のトポスの説明のあとに、「肯定と否定」のトポスの説明が始まるときにも *ἐπειτα* から始まっている。したがって、「肯定と否定」のトポスだけは、他の「対立」のトポスとは別種のトポスとして区別して扱っているように思われるのである。また、「肯定と否定」のトポスは、命題の形をとっていない。挙げられている例はいずれも命題の中の主語（あるいは基体）として、あるいは述語として、命題から取り出された形で考察されている。

### 4.3.5 第六巻の「対立」のトポス

定義に関するトポスに関しては、『トポス論』第六巻第9章の中で「対立」のトポスが取り上げられている。「対立しているものについて、対立している説明文が〔定義項として与えられて〕あるのかどうかも見なければならぬ」(147a29)と述べられ、そこでは、「二倍」と「半分」という関係的なものを例として用いて説明される (a30–31)。さらに、「反対」に基づいたトポスが挙げられ (147a31–b5)、その次に「欠如」に基づいたトポスの説明がなされている (147b26–148a2)。ただし、この箇所での「欠如」は、「欠如と所有」という形で、「所有」の対立概念としての「欠如」という意味に限定されていない。アリストテレスは「反対のものいくつかは、もう一方の欠如によって述べられる」(147b4–5)と述べたり、「さらに、欠如に即して述べられたものを答える人が、それがその欠如であるところの当のものを答えなかったどうかを見るべきである。たとえば、「所有」あれ、「反対」であれ、その他なんであれ、それらの欠如であるところの当のそれを答えなかったどうか」(147b26–8)と述べている。これらの箇所でアリストテレスは、少なくとも「所有」と「反対」の二つには、対応する欠如が存在すると考えていることがわかる。

このように、『トポス論』では一貫して「反対」のトポスは「対立」のトポスの一種として、他の三つのトポスとセットになっているように見える。少なくとも、「欠如」と「関係」のトポスとはセットになっているように見える。

## 4.4 『弁論術』の「反対」のトポス

これに対して、『弁論術』における「反対」のトポスは、単独で取り上げられている。

そして、証明的なエンテューメーマのトポスの一つは、「反対のものども」に基づくトポスである。というのは、反対のものに反対のものが属すかどうか考察すべきであり、一方で立論を破棄する人は、属さないかどうかを、構築する人は属すかどうかを考察すべきである。たとえば、「節度を保つことは、良いものであるということ、というのは放埒であることは、害があるからである」と述べるように。



あるいは、『メッセニア人を讃える演説』にあるように、「というのも、もし戦争が現在ある悪の原因であるなら、平和でもって正しくすべきである」と言う場合のように。

〔また次のような例がある〕

なぜなら、いやしくも、意思に反して悪しき行いをする人に怒りを募らせることが正しくないならば、強制されて他の人に善行を為す人に感謝することは適切ではない。

〔あるいは〕

しかし、いやしくも、死すべき人において嘘をつくことが信じられるものであるならば、君は反対のことも認めなければならない。つまり、死すべき人間には、多くの信じられない真実があるということになることを

(*Rhet.* B 23. 1397a7–20)

『弁論術』の「反対」のトポスの説明は以上である。論理的な規則に当たる部分は、「反対のものに反対のものが属する」という箇所になるだろう。すなわち、AとBが反対の関係にあるとき、AにCが帰属する(AがCである)ならば、Bには、Cの反対の関係にあるものDが帰属するということである。上記引用の最初の例では、Aが「放埒であること」、Bが「節度を保つこと」、Cが「害があること」、Dが「良いものであること」ということになるだろう。このような四項関係に基づくトポスは、『トポス論』の「反対」のトポスにも共通である。

この『弁論術』の「反対」のトポスは、「欠如や所有」、「関係」、「肯定と否定」の各トポスを含むとは考えがたい。したがって、残り三つの「対立」のトポスは、『弁論術』の別のトポスとの一致を望まなければならない。

#### 4.5 「矛盾対立」のトポスと「肯定と否定」のトポス

『トポス論』の残り三つの「対立」のトポスのうち、『弁論術』のトポスとの一致が見いだしがたいのは、「肯定と否定」のトポスである。

そもそも「肯定と否定」のトポスは解釈が難しい。というのは、『トポス論』においてトポスを用いる推論は問答法の推論であり、Whitakerが指摘するように(Whitaker 1996, 180)、問答法にとって肯定と否定の対立関係は、問答の中に含まれる推論の論理的規則というよりも、問答の過程全体に適用される論理的規則と見なすべきものであり、問答法そのものを成立させる規則として用いられているからである。あるいは次の点も考慮が必要である。すなわち、肯定と否定は命題の対立関係であるが、他の三つの対立関係は概念間の対立関係である。つまり、命題の対立関係と、概念間の対立関係に基づくトポスは扱いが異なることになる。そもそも「肯定と否定」のトポスが成立していると思なすべきなのかという問題があるのである。

おそらく『トポス論』の「肯定と否定」のトポスのうち命題の対立関係に基づくトポスとして理解できるのは、第二巻第8章(113b15–26)のみであろう。その他の「肯定と否定」のトポスとして述べられている箇所は、命題ではなく主語、あるいは述語の肯定と否定の表現に基づいている。したがって、やはり「命題の肯定と否定」に関するトポスそのものが考え難いものであり、命題の肯定と否定という観点では、「対立」のトポスのひとつに含めることがそもそも困難だと考えられる。むしろ『トポス論』の「肯定と否定」の対立関係は、主語か述語の「肯定表現」と「否定表現」のトポスとして理解すべきなのだろう。第二巻第8章の場合も、「肯定表現」と「否定表現」の随伴関係(*ἀκολουθήσις*)に基づくトポスと考えることも可能である(Cf. Alexander, *in Top.* 190.

25ff.<sup>12)</sup>).

一方で、Rubinelliは「肯定と否定」の対立関係を、矛盾対立関係(contradiction)として、1400a14–22の「矛盾対立」のトポスと結びつけようとしているように見える。Rubinelliは1400a14–22のトポスに一致するトポスは、『トポス論』第二巻第7章113a20–23だと見ているようである(Rubinelli 2009, 75)。この両方の箇所を以下に挙げる。

さらに、ある付帯性に反対の何かがあるとき、付帯性が帰属すると言われている当のものに〔その反対の何か〕が帰属するかどうかを考察すべきである。というのは、もしこれ [=付帯性に反対のもの] が帰属するならば、かのもの [=付帯性] は帰属しないだろうから。というのは、反対のものどもが同時に同じものに帰属することは不可能だからである。(Top. B 7. 113a20–23)

別のトポスは、論駁的なものであり、整合しないこと考察することである。まず異議を唱える人には、たとえば「彼は、あなたたち〔アテナイ市民〕を愛すると言いながら、しかし三十人政権を共謀したのだ」と言い、その一方で自分自身には、「彼は私を訴訟好きだと言うが、しかし彼は私がひとつでも訴訟を起こしたと証明することはできていないのだ」と言い、そして自分自身と異議を唱える人には、「この人は、決してお金を貸したことなどないが、しかし私はあなた方の多くに身代金を支払って解放してきたのだ」と言うように、それぞれの場合を別々に、あらゆる時、行い、発言から、何か整合しないことがないかどうかを考察することである<sup>13)</sup>。(Rhet. B 23. 1400a14–22)

Rubinelliが見る通りに、この二つのトポスを同種のトポスだと見るのは困難であろう。113a20–23のトポスは、反対概念が同時に一つのものに帰属することはあり得ないという規則に基づいたものであるが、『弁論術』の方のトポスは、「不整合」(ἀνομολογούμενον)を指摘するトポスである。必ずしも、反対概念に基づくとは限らない。

また、どちらのトポスも、肯定命題と否定命題の対立関係に厳密に基づいたトポスでもない。肯定表現と否定表現の対立関係でもない。少なくとも113a20–23について、アレクサンドロスは、肯定と否定の対立だとは見なししていない(Alexander in Top. 187. 10–188. 3)。1400a14–22のトポスにしても、ἀνομολογούμενονとἀντικείμενονが同じである、あるいはἀντικείμενονの一種であるとは言い難い。むしろこのトポスは、対人論法的なトポスであり、Rubinelliの分類で言えば、Type IVのトポスに該当し得るものではないかと思われる。

以上から、Rubinelliの解釈は妥当ではないということ、そして「肯定と否定」のトポスについては、『弁論術』において見いだしがたいということになるだろう。

#### 4.6 「相関関係」のトポスへの還元の問題

さて、『トポス論』の「対立」のトポスのうち、「所有と欠如」と「関係」のトポスを、『弁論術』のトポスの中に見いだすことはできるだろうか。その候補としては、「相関関係」のトポスが挙げられる。そこでまずこの「相関関係」のトポスを引用することにする。

そして他のトポスは、お互いに対してのもの [=相対的なもの] からのものである。というのは、上手にあるいは正しく為すことが、一方のものに属す場合、受けること [被る] がもう一方に属す。また命じることが一方に属すなら、〔命じた通りに〕為したことも属す。

<sup>12)</sup>アレクサンドロスは、第二巻第8章における四つの「対立」のトポスを「随伴関係」を主軸にして注釈している。

<sup>13)</sup>Kasselの提案に従い、εἴ τι ἀνομολογούμενον ἐκ τόπων καὶ χρόνων καὶ πράξεων καὶ λόγων,の位置を、χωρὶς μὲν ἐπὶ τοῦ ἀμφισβητοῦντοςの後に移して読む。またτόπωνではなく、πάντωνで読む。

たとえば、税金取り立て人ディオメドンが、税金について、「実際、あなた達にとって売ることが恥 [醜いこと] ではないなら、我々にとっても売られること [=買うこと] は恥ではない」と述べたように。

またもし受けた人に、「上手に」あるいは「正しく」が帰属するならば、為した人にも帰属する。そして、この場合には、誤って推論されることがある。

というのは、ある人が「正しく」何かを被る場合、それは正しく被ったのであるが、しかし、おそらくそれはあなたによって被ったのではないからである。

それゆえ、何かを被る人は被るに値するか、また為す人が為すに値するのかどうかを、別々に考察すべきである。その上で、どちらでも適用するような仕方で用いるべきである。というのも、ときにこのようなことは一致しないものであるし、またテオデクトスの『アルクマイオン』の場合のように、それで何も支障がないからである。すなわち、アルペシボイアが「あなたの母を、死すべきもののうちで嫌う人は誰もいなかったのですか」と尋ね、アルクマイオンがそれに答えて、「いや、事柄を分けて考えなければならない」と言った。そして、アルペシボイアがどのようにと尋ねると、アルクマイオンはその問いを受けて、次のように言った。

彼らは彼女が死ぬべきであると判断したが、しかし私が殺すべきだとは判断しなかった。

またデモステネスとニカノルを殺害した者たちについての裁判の場合も、この例に該当する。というのは、彼らが殺したのは正しい仕方だと判断されたので、彼が死んだのは正しいと思われたのだからである。また、テーバイで殺された人についての裁判もそうであり、その人について死ぬことが正しかったかどうかを判断することを〔被告人が裁判官に〕要求するのであるが、それは正しい仕方ですら死んだ人を殺すことは不正ではないという理由で要求しているのである。(Rhet. B 23. 1397a23-b11)

この「相関関係」のトポスは次のような規則である。すなわち、AとBが相関関係にあるとき、AがCであるならば、BもCである。上記の例では、「被る」と「為す」、「売る」と「買う」、「命じる」と「従う(命じられたとおりに為す)」、「死ぬ」と「殺す」が、相関関係があるものとして扱われている。

この「相関関係」のトポスが、「欠如と所有」や「関係」のトポスと一致すると言えるだろうか。Rubinelliは114a13-25の「関係」のトポスとの一致を主張している(Rubinelli 2009, 74; 76)。しかし、これは誤りであろう。というのは、「関係」のトポスと「相関関係」のトポスでは基づく規則が異なるからである。

114a13-25のトポスが基づく規則は、AとBが「関係」あるいは「欠如と所有」の関係にあり、CとDも同様の関係にあるとき、AがCならば、BもDである、というものである。たとえばアリストテレスは、「関係」のトポスとして、「知識が判断であるならば、知識されるものも判断されるものである」という例を挙げている(114a18-9)。ここでは「関係」概念に基づいた「知識」と「判断」というペアと、「知識されるもの(知られるもの)」と「判断されるもの」という別のペアがあり、四項関係となっている。

たしかに、「知識」と「判断」のような「関係」的なものを、「相関関係」として捉えることは許されるだろう。さらには、「感覚」と「無感覚」のような「欠如と所有」の関係(114a11)も、「相関関係」に含めることができるかもしれない。しかし、上記引用の二つのトポスが、トポスとして一致していると言うことはできないだろう。

## 5 結論

本稿では、Rubinelliが考えるように、『トポス論』の「最も利便性の高いトポス」が、『弁論術』の共通のトポスへと還元されているのではないかと想定していたが、「対立」のトポスのすべてについて当てはまるものではなかった。おそらく「反対」のトポスは、『弁論術』において一つの独立したトポスとして扱われるようになったが、その他のトポスは『弁論術』においては取りあげられていないと考えざるをえないだろう。その理由は推測になるが、「対立」のトポスのうち、「反対」のトポスのみが、実際に頻繁に用いられたトポスであり、残りの三つのトポスは相対的に使用頻度が少なかったために、『弁論術』においては省略されたのかもしれない<sup>14</sup>。

いずれにせよ、アリストテレスが『トポス論』から『弁論術』へトポスを引き継ぐ場合に、「最も利便性の高いトポス」をそのまま引き継いではいない。したがって、本稿の考察の範囲では、『トポス論』よりもより一般的に適用可能なトポスの推論が『弁論術』において扱われていると主張するには困難があると言わざるをえないだろう。

## References

- [1] Brunschwig, J. 1967. *Aristote: Topiques, tome I : Livres I-IV*, Paris: Les Belles Lettres.
- [2] ——— 2007. *Aristote: Topiques, tome II: Livres V-VIII*, Paris: Les Belles Lettres.
- [3] Burnyeat, M. F. 1994. “Enthymeme: Aristotle on the logic of persuasion”, in Furley and Nehamas: 3–55.
- [4] Furley, David J, and Alexander Nehamas (eds.) 1994. *Aristotle’s “Rhetoric”: Philosophical Essays*. Princeton Legacy Library. Princeton: University Press.
- [5] Grimaldi, W. M. A. 1980. *Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*. 1st ed. New York: Fordham University Press.
- [6] Kassel, R. (ed.) 1976. *Aristotelis Ars Rhetorica*, Berlin/New York: de Gruyter.
- [7] Kennedy, G. A. 2007. *Aristotle. On Rhetoric: A Theory of Civic Discourse*. 2nd ed. Oxford: University Press.
- [8] Raphael, S. 1974. “Rhetoric, Dialectic and Syllogistic Argument: Aristotle’s Position in “Rhetoric” I-II.” in *Phronesis* 19.2: 153–167.
- [9] Rubinelli, S. 2003. “Τόποι e ἴδια nella Retorica di Aristotele.” in *Phronesis* 48.3: 238–247.
- [10] Rubinelli, S. 2009. *Ars Topica: The Classical Technique of Constructing Arguments from Aristotle to Cicero*, Argumentatin Library 15, Springer.
- [11] Slomkowski, P. 1997. *Aristotle’s Topics*. *Philosophia Antiqua* 74. Leiden: Brill.
- [12] Smith, R. 1997. *Aristotle: Topics Books I and VIII, with excerpts from related texts*. Clarendon Aristotle series. Oxford: Clarendon Press.

<sup>14</sup>池田は、不完全と述べつつ(池田 2007, 418), アリストテレスの著作の中で実際に用いられている事例を訳注において挙げている。その中で「反対」のトポスについて「アリストテレスの諸著作におけるこのトポスの用例は最も多いと思われる」と述べている(池田 2007, 85n1)。それに対して、「関係」や「欠如と所有」のトポスについての用例の指摘は比較的少ない。このことは、「対立」のトポスの中で「反対」のトポスだけが、専ら用いられていたことの一つの証拠となりえるかもしれない。

- [13] Wallies, M. (ed.) 1891. *Alexandri Aphrodisiensis In Aristotelis Topicorum Libros Octo Commentaria*, Commentaria in Aristotelem Graeca (GIAG) II. 2, Berlin: G. Reimer.
- [14] Whitaker, C. W. A. 1996. *Aristotle's De Interpretatione: Contradiction and Dialectic*, Oxford Aristotle Studies, Oxford: University Press.
- [15] 池田康男 (訳). 2007. 『アリストテレス『トピカ』』. 西洋古典叢書. 京都大学学術出版会.
- [16] 山口義久 (訳). 2014. 『トポス論』. 新版アリストテレス全集 第3巻. 岩波書店.

(たかはし しょうご、徳山工業高等専門学校 [哲学])<sup>15</sup>

---

<sup>15</sup>本稿は、文部科学省科学研究費補助金 (研究活動スタート支援) 「アリストテレスの問答法の理論とその発展的解釈の研究」 (研究課題番号: 15H06815) の研究成果の一部である。

## The Common or Different Features of *topos* in Aristotle's *Topics* and *Rhetoric*

Shogo Takahashi

The purpose of this paper is to examine the common or different features of *topos* in Aristotle's *Topics* and *Rhetoric*, and I attempt to investigate whether *topos* in *Rhetoric* is more generally applicable to reasoning than *topos* in *Topics*.

*topos* is the logical rule or schema required to make reasoning, either in *Topics* or *Rhetoric*. In *Topics*, Aristotle classifies *topos* in relation to four predicables (i. e. definition, property, genus, accident). On the other hand, in *Rhetoric*, Aristotle divides the elements of rhetorical reasoning into 'common' and 'proper', and he calls *topos* 'common'. Further, in *Rhetoric* II23, the 'common' *topoi* are listed and explained.

Indeed, in *Topics*, it is possible to think about another classification than the classification related to the four predicables. Aristotle calls some kinds of *topos* 'the most opportune *topos*'. For example, *topos* of 'contraries', *topos* of 'inflection' of words, as well as *topos* of 'more and less' are emphasized. The classification related to 'the most opportune *topos*' is larger and more general classification than that related to the four predicables.

'The most opportune *topos*' overlaps with part of *topos* in *Rhetoric*. Therefore, Aristotle regards 'common' *topos* in *Rhetoric* as 'the most opportune *topos*' in *Topics*.

But, as far as we examine both writings in more detail, it does not seem to be able to associate the common *topos* with 'the most opportune *topos*'. Because there appears to be differences between the two. the *topos* of 'contraries' in *Topics* is treated as a subclass of the *topos* of 'opposites', but it seems to be treated independently and is one of the common *topoi* in *Rhetoric*.

Rubinelli seems to think that the *topoi* of 'privation and possession' and 'relation' which are included in the *topos* of 'opposites' in *Topics* are treated as *topos* of 'correlated' in *Rhetoric*. But in *Rhetoric*, Aristotle does not consider the remaining *topos* of 'opposites' to be the *topos* of 'correlated', except for the *topos* of 'contraries'. Because the *topos* of 'correlated' has the different logical schema than the *topoi* of 'privation and possession' and 'relation'. Therefore, we cannot insist that the classification of *topos* in *Rhetoric* is more general in terms of application of *topos* than the classification of *topos* related to the four predicables in *Topics*.